

---

# 夏色!!

雨月 照琵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夏色！！

### 【Zコード】

N8112E

### 【作者名】

雨月 照毬

### 【あらすじ】

「夏休みの間留守をよろしくね」母親のその一言で夏休みは波乱の予感…。今里家の3兄弟と夏休みをひとつ屋根の下で過ごすことになつた奥津莉真。複雑な三角関係ならぬ四角関係の結末は？

## 第1話・夏休み

7月中旬の満員電車の中、奥津莉真<sup>りま</sup>は涙目で必死に声を殺していた。

「どうしよ…。声だしたいけど…。誰か助けて！」

必死に叫んでいると男の手がスカートの中へと侵入してきた。

「…！」

髪の毛がつまそうな肩を小むくふるわせる。

あと…一駅もあるの…

そう、考えている莉真を抱き寄せる手があった。

「おい、おっさん。俺の後輩に何してんだよ」

莉真はぱつと顔を見上げて目を見開いた。

その声の先には同じ高校の制服を着た、ショートヘアといった感じの髪の少年が立っていた。

「今里先輩！？」

「てめえも助けを呼べ…！」

どなり声にびくっと肩を震わせ抱き寄せられた体から離れた。

「あ…ありがとうございます！」

電車を降りてからの道のり隣にはぴつたりと先ほどの先輩…今里碧<sup>みどり</sup>が歩いている。

「あの…」

「何？」

「少し離れてくれませんか？」

莉真はうつむききみに静かに呟いた。

莉真の訴えに碧は小さく舌打ちをしてすたすたと歩いて行った。その背中を見て大きくため息をつく。

幼馴染だからって…親じやあるまいし、少しのひとしき…

駅から学校は近く数分歩けばすぐ着くといつといふにある。

莉真は教室に着くと机に突つ伏した。

莉真の様子を見た友人、秋元萌が話しかけてきた。

「どーした？また、今里先輩となにかあつた？」

顔をあげたその先には短髪の活発そうな少女が腰に手を当てて立っている。

「そーなの。せっかく明日から高校入ってから初めての夏休みなのに…」

また顔をうつむかせ頭を抱える。

「最悪だあ」

「あの人もしつこいねー。だけど、校内で一番もてるんだよね…。あんなののどこがいいんだか」

「萌ちゃん…。その発言は全校の女子を敵にまわしちゃうよー。」

顔をあげてそう言つと萌は莉真の頭をくしゃつとななる。

「んー？あんたが見方でいてくれればそれで十分だよ」

「萌ちゃん…」

莉真は困ったようにクスッと笑う。

「あんたは笑つてる顔のほうが可愛いよ」

萌は腕を組み考え込むように唸つた。

「まあ…今里先輩の気持ちもわからなくはないけど…」

その言葉に莉真は首をかしげて萌の顔を覗き込む。

「なんで？」

萌はあきれたとこ顔をして溜息をついた。

「だつて…つてしょうーがないか…。あんた鈍感ちゃんだもんねー」

「それとこれとは関係ないでしょー！」

鈍感と言われた莉真はむつと頬を膨らます。

その顔をみて萌はくすくす苦笑する。

「関係あんの！結構あんた男子からモテてるんだよー？そりゃー先輩も気が気じやないよね」

莉真は田を見開いたが、すぐに平然とした表情に戻る。

「へー」

「うわつ、何そのいかにも興味ないです的な返事は…」

「だつて…、あんまり男性に関して嫌な記憶しかないから」

「まあねえ……でも、悪い奴ばっかじゃないとあたしは思つてるけど」

莉真は視線をそらすように目を伏せる。

「そんなこと……わかつてるけど……」

萌が口を開きかけたと同時にチャイムが鳴り担任が教室へと入ってきた。

「やつたあ！ 終わつた終わつたあ」

莉真は朝のテンションとは違いウキウキとした様子で鞄に荷物を入れている。

朝のテンションはなんだつたのだろうか…

萌やクラスメイトは口をぽかんと開けて莉真を見ている。

視線に気づいた莉真は首をかしげる。

「あれ？みんな、ポカーンとしてどうしたの？」

にこにことした表情でクラスメイトに問いかける。

男女問わず人気のある彼女のその笑顔にときめいたクラスメイトは何人いたことか。

やつぱ、かわいいよねー。妹にほしいわあ

告白したいけど、今里先輩が怖いし…

「「なんでもないよー」」

「ふうん…変なの」

自宅にたどり着いた莉真は元気よく玄関を開ける。

「たつだいまー」

そして足元を見ると見知らぬ靴が数足置いてあり、リビングからは賑やかな声がする。

隣のおばさんたちでも来てんのかなあ…

リビングの扉を開けると母・友子が笑顔で迎えた。

「あらつ、莉真おかえりー」

「ずいぶんにぎやかだね。誰か来てんの？」

「ええ、前にほら言つてたでしょ？」

「ああ、一ヶ月間くらい海外の別荘で過いりすつていつ？」

「ここにこしながら母はうなづいた。

「やうそれ、百合子さんたちと行く」とになつてゐるからね。今夜から百合子さんたちの息子さんたちと一緒に過いりすのよ」

莉真はあつけにとられ鞄を落とした。

その鞄を友子はあらあらと言いながら拾つた。

「えー！一緒に行かないとは言つたけどそれは聞いてないよー？」

友子は頬に手を当てうぶつとほほ笑んだ。

「だつて、言つてないもの。私たちは今日これから出発しちゃうからあとよろしくね」

納得のいかない顔で莉真はうなづいた。

「うん…」

「翠君と清也君はすぐ帰つてくると思つから」

リビングのへと入ると父と今里家の夫婦が楽しそうに話していた。父・久雄が莉真に気づき、そのあとで碧の両親・百合子、文次も気づく。

「おかえり、莉真。その様子だとお母さんからはもう聞いたみたいだね」

「留守の間大変だらうけどバカ息子たちをよろしく頼むわ」

「はあ…」

友子は時計を見て大変とつぶやく。

「そろそろ、タクシーが来る時間だわ。じゃあ、あとよろしくね

「うん。いろいろと納得はいかないけど…気をつけて」

親たちが出て行つたリビングで一人ソファーに寝そべる。

「碧はともかく…。清也さんと翠さんは久しぶりに会うのかあ

急に睡魔に襲われ、そのまま目をつぶつてしまつた。

『莉真ーっ。大丈夫か！？』

莉真は熱いアスファルトの上でうずくまつて泣いていた。

『あーあ。こんなに血が出てる…。ほら、早く洗いに行こひー。』

幼い少年の手が同様に幼い莉真の手を引いた。

『ふえーん。いたいよお、碧おにいちゃあん』

『ーーー。ほらっ、いたいのいたいのとんでいけー。もう、大丈夫

！』

泣きじやぐる莉真の頭をなでながら碧は呪文を唱えた。

『ほんとお？』

嗚咽をあげながら問いかける莉真に優しく笑いかける。

『うん！俺、うそつかないだろ！？』

小さい頃は優しかったのに…。いつからあんなになちゃったんだっけ…

重たい臉をあげると、長髪の顔立ちの整つた男性が顔を覗き込んでいた。

「あ、困さめた？だめだよ、女の子がこんな無防備で寝てたら…」寝起きでばーっとして頭で莉真は一生懸命考える。

この人誰だ？

じいっと顔を凝視する莉真に男性は苦笑して、頭をかいた。

「まあ、しようがないか…。何年も会つてないからね。俺、清也だよ、覚えてる？」

やつと莉真の思考回路がつながる…と同時に莉真は顔を真っ赤にさせた。

「お、覚えてますよーお久しぶりです」

忘れるはずがないです…。ずっと…ずっと見てきたんです

『ただいまー』

いつも声が聞けるのはこの時… 清也さんが大学から帰つてくるときだけ…

いつも2階の自分の部屋の窓から清也さんの背中を眺めてる…

話したいな…。清也さんは私のこと覚えてくれてるのかな?  
小さい頃の“憧れ”はいつしか“好き”という気持ちになつていた。  
でも…、いつも碧先輩の邪魔で会話なんてすることはできなかつた…

「どうかした？ 莉真つ赤だよ？」

「ほえ？ な、なんでもないです」

清也はにこりと笑つて莉真の髪にふれる。

そのしぐさに莉真はどきつとした。

「きれいになつて…見違えちゃつたよ」

「あつあの…。 つ

突然莉真はビクンと肩を震わす。

清也の指が髪から肩へ…そして頬へとなぞつた。

二人つきりの音は蝉の鳴き声だけの静かなリビングで一人は見つめあつた。

はわわ…。心臓の音聞こえちゃうよ…はづかしいんですけどー

「莉・真…」

「な、なんですか？」

「なーんて、驚かせてごめんね。ほら、スカートがしわだらけになつちゃうから着替えておいで」

清也は意地の悪い笑顔を浮かべて莉真をソファーから立たせた。  
そして、急に顔を近づけて耳元でささやく。

「なんなら、俺が着替えさせてあげよっか？」

「もうつ、からかわないでくださいー自分で着替えられますー！」

莉真は少しむすつとしながら自分の部屋へ向かつた。

その後姿を見て清也はクスッと笑つた。

「かわいいなー。碧が会わせてくれなかつた理由もわかるな

碧に負けないよつ本氣でいかなとなあ…

莉真は一人部屋の中で着替え終わつたあとボスボスと枕を叩いていた。

「恥ずかしいー。ひとりでドキドキしてバツカみたい…  
「…でも、かつこいいな…」

動悸を抑えてリビングへと入ると碧と翠も来ていた。

短髪の髪の男性が腕を広げて莉真を迎えたが、莉真は苦笑してスル

ーした。

「あ、莉真ちゃん。久し振りー。つて…ちょっと冷たあい」

「お久しぶりです。あ、お部屋のほうは一人一部屋で用意しておきました」

「サンキュー、莉真」

近づいてきた碧から莉真はさつと後ずさる。

そうだつた！すっかり、忘れてた。このひともいるんだつた！！

さあ、なんだかひと波乱がありそうな予感… 莉真の夏休みはどうなるんでしょうか？

## 第1話・夏休み（後書き）

夏休みのお話しへついで連載ですが短くやらせていただきます。

## 第2話・兄妹

莉真は背後からの気配にビクッとなり、思わず持っていた包丁を向けてしまった。

「いやあ！」

振り向いたその先に立っているのは最も苦手としている、幼馴染の碧みどりだった。

「てめえ…。何様のつもりだ！？」

怒鳴られた莉真は肩を震わして、うつむいた。

「料理中なんですから、邪魔しないでください」

苦手意識はだめだよねー。わっかかるけど、わかってるけど！

莉真はまな板の上に置いてある野菜を切り始める。

そうすると今度は横から翠すいがのぞいてきた。

「莉真ちゃんどうしたの？碧がセクハラでもした？」

「いえ、いきなり背後に立たれてびっくりしただけです」

ふうんと言しながら翠は用意されてある材料を眺めた。

「今夜はコロッケかな？」

「そうですよー。確かに皆さん好きでしたよね」

翠の問いかけに莉真はにこにこしながら答えた。

「よく覚えてるねー。なんか手伝えることある？」

「あ、じゃあこいつのじゃがいもの皮むきお願いしてもいいですか？」

「まつかせてー」

一人の様子をソファーから碧が恨めしそうに眺めていた。

その碧の様子を清也は見て、クスッと笑つて新聞から顔をあげる。

「そんなにうらやましい？」

「兄貴にはかんけーねえよ」

清也は新聞を置んで、眼鏡を外した。

「ふーん」

「なんだよ…」

「おまえはや、莉真のことが好きなの?」

突然の清也の質問に碧は顔を真っ赤にしてソファーから落つ *レナム* うになる。

「な、何急に…」

「そういう反応するの?」とせ…」

物音に振り向いた莉真と田<sup>た</sup>が会い、碧は視線をそらす。あわててソファーに座り、平然を装<sup>まつ</sup>う。

「だつたら、なんだよ…」

「いや、なんでもないよ」

清也は莉真の入れたコーヒーを口にした。

「あの一人は仲悪いんですか?」

莉真はじゃがいもの皮をむきながら翠に問いかける。

「なんで?」

「雰囲氣が冷たい…?」

翠はにこりと少年のような笑顔を浮かべてじゃがいもを置き、莉真の頭をなでた。

「仲良いいから、心配はこらないよ」

「なら、いいんですか?」

ふうとため息をつきながら莉真は一人をちらりと見た。

「溜息つくと幸せ飛んで行っちゃうよ~」

翠の言葉に莉真はクスッと笑った。

「莉真、これおいしいよ~おばさんが白饅<sup>しらま</sup>したのもわかるなあ

清也は「ロッケを口にしながら莉真を褒める。

莉真は首をかしげる。

「白饅?」

「ああ、うちにおふくろと話に来る度に莉真の料理はつまこつて」

「やうだねー、こつも言つてるよ。だから、今回のお泊まりは楽し  
みにしてたんだよ」

清也と翠に褒められて莉真は頬を薄紅色に染めた。

「ありがとうござります」

「スープもサラダもおいしいねえ。あ、そうだ」

翠がぱつと顔をあげて莉真を見る。

「どうしました？」

「明日、塾なんだー。弁当お願ひしてもいいかな？」

「構いませんよ。何時までに作ればいいですか？」

「ええっと、8時くらいまでに」

莉真はうなずきながらこいつとして、腕をまくつて見せた。

「はい。腕によりをかけてつくりますね」

「楽しみだなあ

塾かあと清也がつぶやく。

「翠はどう受けんの？」

「僕？兄さんと同じと受けよつかと思つて」

「そうか…。なんなら、勉強教えようか？」

「わかんないどこあつたらお願ひします」

一人のやり取りを見る莉真に碧が気づいた。

「どうした？」

「え？いや、兄弟つていいなあと思つて…」

「そつか、お前一人つ子だもんな」

「この夏休みはお兄ちゃんが三人もいるみたいで楽しそうです」

ほほ笑んだ莉真に碧はどきつとした。

現在翠は莉真や碧とは違う高校に通つており、三年生で受験生だ。今里家の三人兄弟はみんな年子である。

その日の夜、莉真は自室で幼いこの[翠]を眺めていた。

「歳月つてすごいなあ…。みんな大きくなつたんだ」

クスッと笑つと扉をたたく音がした。

「はい？」

扉があいて清也が顔をのぞかせる。

「バスタオル貸して」

「あ、今出しますね」

椅子から立ち上がって箪笥へと向かうと後ろから清也が抱きしめてきた。

莉真は体をこわばらせてそっと清也の腕にふれる。

清也は抱きしめる腕に力を込める。

「せい……や……さん？」

「碧なんかにはわたさない。ずっと、君のこと想っていたんだよ……。好きなんだよ」

扉の隙間から誰かがその様子を見ていたがすぐに立ち去った。

「清也……」

莉真が口を開こうとするのを清也は口をふさいで止める。

「返事は今すぐじゃなくてもいいんだ……。ただ、夏休みの最後のほうには聞かせてね」

そういうと莉真の手からタオルケットを持って部屋を出た。

残された莉真はその場に力なく座り込んだ。

清也さんが……私を　?

清也さんが私のこと…

少し開けた窓から入ってきた風が莉真の髪を乱す。

莉真は胸がちくんと痛むのを感じる。

「れいはづなのに…

呆然と座つていると碧が開いている扉から顔を覗き込む。

「莉真？」

びくつとなつて振り向くと首をかしげた碧が突つ立つていた。

碧は莉真に近寄り田の前にしゃがんだ。

「ほーっとしてどうした…？あ、ほうっとしてるのはいつもか」

碧の言葉を聞いて莉真はむつとして碧の頭を小突いた

「碧さんひどい…碧さんだけには言われたくない…」

「おーよく言つわ…。」

莉真はちよつと碧を見て苦笑する、碧もつられて笑つた。

碧はくしゃつと莉真の頭をなでる。

「あんな深刻そうな顔してるとつもこつちのせうがずつといいぞ」

「碧さんだつていつも深刻そつなかおしてるじやない」

「まだ言つか…」

「つーまちやん、碧知らない？…つていいにこたんだ」

今度は翠が顔をのぞかせてきた。

「翠、なんか用？」

「碧ー、お兄さんでしょ？何回も言わせるな」

「つーまちうとにこにこしながら碧の頬をつかみひつぜる。

「ふーはひえんれひはー。すいませんでしたー。」

その一人の様子を見て莉真は茫然とする。

「これが家の顔というものかあ

莉真ははつとして翠に話しかける。

「碧さんに何の用ですか？」

翠はぱつと碧の頬から手を離して莉真を見る。

碧は横で頬をさすっている。

「ぱつからやう。思いつきりひっぱつやがつて」

「ん? 何か言つた?」

にこつとしながら碧のほつを向く。

「なんでもございません…」

「あ、そうそう。なんか携帯なつてたよ? それを言つに来ただけ」「それだけかい」

碧がさつて行くと莉真はくすくすと笑う。

「ほんとに仲良いんですね…」

「でしょ? それよりも…」めんね。兄さんの告白聞いたやつた…」

突然うなだれた翠に莉真はびっくりする。

「はえ? ああ…別に私はなんとも思つてないんですけど

「あ、そうなの? いやあ、立ち聞きするつもつはなかつたんだけどね」

翠は苦笑いをして頭をかいだ。

莉真はため息をついて目を伏せる。

「私はどうしたらいいんでしょ?…」

その言葉を聞いた、翠は一瞬目を見開く。

「僕は君じゃないからね…」

翠の言葉に莉真は顔をあげる。

「ただ…君の決定次第で兄弟仲が壊れるとは限らないから、大丈夫」

「翠さん…」

翠はにこつと笑つて莉真の手をそつと握る。

「僕でよければいつでも相談に乗るから。む、兄さんが出たらお風呂入っちゃいなさい」

莉真もつられてほほ笑む。

「翠さん… ありがと」

「莉真ちゃん、おはよー」

リビングへ最初に顔を出したのは翠だった。

莉真は朝「はん」を用意する手を止めてほほ笑んだ。

「おはよー」翠は「ま」とお弁当用意しておきましたから」と言つて台に置いてある弁当を示した。

「ありがとー」

「す… 兄さんは朝からトンショーン高いなあ」

「おはよー」翠は「ま」

に「ひ」と笑つた莉真に碧も笑いかける。

「おは… あ、今日の午前中は俺生徒会でいないから」

「じゃあ、今日は莉真と二人きりだな」

碧の後ろから顔を出した清也と田が合ひ、莉真はとたんにやらした。翠は一人を見比べて、フォローするように話す。

「おはよー、兄さん。莉真ちゃんは兄さんにやましこじでもあるのかな?」

「ないですよー。も「ひ。せら食べないと一人と遅れちゃいますよ」

3人がドタバタやつてくるそばで清也は「じ」と莉真を見つめる。

清也の様子を碧が見て眉をひそめた。

「じゃ、こつてらつしゃー」

莉真が玄関先で手を振ると一人は振り返つた。

「行つてくるね」

「昼には帰るから」

沈黙を先に破つたのは碧だつた。

「なあ…」

「何?」

「……なんでもない」

翠は眉根を寄せ、碧を小突く。

「気になるじやんか」

「こーの」

「さいですか」

翠は諦めたように溜息をつく。  
碧もつられて溜息をついた。

一方家に残された莉真は…

行つてしまつた…。どうしよう一人きりだよう『氣まずいよ…

玄関で一人身もだえていると背後から清也が近寄る。

清也の気配に気づくと、いてもたつてもいられず台所へ戻り食事の片づけをはじめた。

「莉真…。俺なんか手伝える?」

一瞬手を止めたがすぐに再開した。

「いえ…。清也さんは休んでいてください」

長い沈黙が一人の間に流れる。

リビングに流れるのは風と蝉の鳴き声、食器を洗う水の音だけだった。

莉真は食器の片付けを終えると次は洗濯物へととりかかり忙しそうにせわしなく動く。

清也はただその様子をじつと見つめていた。

家事がひと段落すると莉真は自分の部屋に入つて扉を後ろ手に閉める。

「はあ…。宿題やろう…」

莉真は椅子に座つて化学のプリントを取り出してやり始めた。  
数時間後…プリントが半分終わるくらいまでに進んだ頃に玄関のチャイムの音がした。

携帯の時計を見ると11時半になつていた。

碧さんかな

「はーー」

玄関を開けると案の定碧が汗だくになつて帰つてきていた。

「おかえりなさい」

「ただいま…。シャワー浴びてもいい?」

「どうぞ」

莉真がにこっと笑つて上げると翠はネクタイをはずしながらあちこちふやく。

「じゃあ、私お皿の支度しますから」

「おう。タオル借りるな」

莉真はほつと胸をなでおろし冷蔵庫を開ける。

あちやー。買い物しなきやだめだなあ。後で行つて」

「まだ7月なのに暑いなー」

翠はタオルで汗をぬぐいながら一息ついた。

「あれ…？」

人通りのまづくと皿を向けた。

「う、う。重たい…」

莉真がふらふらしていると急に手元が軽くなつたのを感じた。

「危なつかしいなー。兄さんとかは一緒じゃないんだ」

声の方へと向くと荷物を持った翠が苦笑して立つている。

「あ、翠さん。塾終わつたんですか？」

「うん、今帰り。そつちの荷物も持つからこれ持つて」

莉真はありがとうござりますといいながら翠から鞄を受け取る。

「なんで、わかつたんですか？」

「えー? よたよたペングインみたいに歩いてる子を見かけてね…。もしやと思つたら莉真ちゃんだつたんだ」

ペングインとつぶやいて眉をひそめる莉真を見て翠はほほ笑む。

「あ、弁当美味しかつたよ。ありがとう。冷凍食品を全く使ってないんだね」

「私の家に冷凍食品は置いてないですから」

「ふうん。晩御飯の買い物かな?」

がさつと袋の中身を見て莉真に問いかける。

「はい…。冷蔵庫の中空っぽだつたんで。……翠さんがいてくれて

助かりました」

莉真はにっこりと笑つて翠を見る。

翠は莉真に気づかれないように小さくため息をついた。

似た者兄弟つてこうこうと言つんだよね…

翌日、翠は塾の教室で同級生にどつかれた。

「翠一。昨日一緒に歩いてた子彼女ー？？」

どつかれた勢いで机に突つ伏した翠は同級生の胸倉をつかむ。

「おまえ何様のつもりだよ」

「いやー翠がキレたあああ…！」

溜息をついて手を離して座ると相手も田の前に座る。

「で？ 彼女なのか？？」

「しつこいぞ健吾。彼女だつたら苦労してないって」

翠は鞄からテキストを取り出しながら答える。

「もしかして、弁当作ってくれた子？」

「うん」

「……好きなのか？」

健吾はドキドキしながら翠を見つめた。

「……さあ…」

翠の生返事に眉をよせて、話題を変える。

「昨日持つてたの買い物袋だろ？ えらいなあ、しかもめっちゃかわいいし」

「あの子のおふくろさん家事苦手だから小さこ頃からよくやつてるよ」

翠はふつと苦笑して頬杖をつく。

「手ごわいライバルもいるしがんばんないとね」

「兄貴と弟？」

翠は片手を開けて健吾を見る。

「なんでわかったの？」

「何年お前の友人やつてると思つてるんだよー」

くすっと笑う。

「おまえにはかないませんなあ」

健吾はにかつと笑うと教室の時計を見上げる。

翠もつられて見上げた。

「おつと、授業始まつまつまづな。俺でよければこつでも相談に乗るぜ！」

はいはいと言いながら手を振った。

家には莉真一人だけだった。

「あれ？ 一人は？」

「あ、碧さんは部屋にこりますけど…。清也さんはお昼のあとどつかに出かけちゃいました」

莉真はお茶菓子と麦茶を用意しながら答えた。

「碧さん呼んできてくれさい。お茶にしましょ」

「りょーかい？」

翠が扉を開けると碧はベットの上に寝そべって本をよんでいた。碧は本から翠へと視線を流す。

「なあ…、兄さん。清也兄さんって莉真のこと好きなのか？」

「なんで僕に聞くの…」

「いや、兄さんならなんか知つてると思つて」

「鋭いね。僕は告白…」

そこまで言つと碧は勢いよく起き上がりて翠につかみかかる。

「はあ…？」

「だから…」

翠はそつと碧の手を離した。

「莉真ちゃんは悩んでるみたいだけど…」

碧はほつとしたよつに座り込む、すると1階から莉真の呼ぶ声がした。

「翠やーん、碧やーん」

「せ、呼んでるよ。行いひ」

二人が階段を降りると莉真がリビングからこっちを覗いている。翠がにこっと笑うと莉真もほほ笑んだ。

4人の思惑が渦巻く中夏休みは過ぎようとしていた

## 第4話・本当の気持ち

夏休みものこりあとわずかとなつた日に莉真は夕陽のあたる部屋で洗濯物を畳んでいる。

碧、翠、清也の3人は買い物に出かけていて家には莉真ひとりである。

「一人つて静かだなあ…」

夏休みもあと少し…

ふと、夏休みの最初に清也から告白されたことを思い出す。

「どう…しよ…」

違う…。私の好きな人は清也さんじゃない、やっぱり憧れでしかないのかな

最後の一枚を畳み終わると一息ついて立ち上がった。

「今夜は3人が晩御飯作ってくれるって言つし。お茶菓子でも作つて待つてようかな」

部屋を出て台所へ向い、お菓子作りを始める。オープンド焼いている暇な時間に莉真は洗濯物をそれぞれの部屋に持つていくことにした。

翠、碧の部屋へと順に置いて行つたところで3人がかえつて来た声が1階からした。

「ただいまー」

「あれ?返事がないね。2階かな?」

翠が見上げると清也が階段へと足を向ける。

「おれが見てくる」

清也の部屋へ入り洗濯物を置いて整理したとき部屋の扉が閉まる音を聞いた。

莉真が振り向こうとしたその時誰かに後ろから抱き締められる。

「莉真…」

「清也さん…。離してください」

莉真の願いとは逆に清やは抱きしめる手に力を込めた。

「そろそろ、返事」

返事という単語を聞いた莉真は肩をビクンと震わす。

清やはそれを感じそのまま抱きかかえてベッドへと押し倒す。

「や…、離して。はな…んつ」

黙つたまま抵抗する莉真の唇を奪つた。

「いやあ」

莉真は清也を力いっぱい押して腕からのがれた。

清やは莉真が涙を流しているのに気づく。

「莉真！？」

莉真は清也から田をそらしばたばたと家を出て行ってしまった。騒ぎを聞いた2人が階段を上つてきた。

「兄さん、莉真ちゃんは？」

清也が押し黙つたままなので翠はため息をついた。

「ちょっと、探してくるよ。碧は兄さんから話しうき出しどう」「ああ」

部屋を出ようとした翠の腕を清也がつかむ。

「おれが行く」

翠は振り返つて腕をつかむ清也の手を離す。

「兄さんが行つたら逆効果でしょう。僕が行つてくる」

清やは舌打ちをしてそっぽを向いた。

「じゃあ、よろしく碧」

「おう、任せとけ」

翠は家を出るとまっすぐ近所の公園へと向かった。

そこは幼いころに4人でよく遊んだ場所で噴水があるきれいな公園だつた。

莉真は小さい頃から何かあるとそここの噴水のところに座つて泣いているのを翠は知つていた。

公園へ着くと案の定噴水のところで肩を震わせて泣いている莉真が見えた。

人がちかづく音がしてびくつとなつて振り向くと立っていたのが翠だつたので莉真はほつと安心した。

「翠さん…」

「莉真ちゃんはよく何かあるとこにきてたね」

そう言いながら翠は莉真の隣へと座る。

「その度にいつも迎えに来てくれたのは翠さんでしたね」

笑顔を作つたがまたすぐに涙があふれてくる。

翠はそつと莉真を抱き寄せた。

一瞬体をこわばらせた莉真だつたがすぐに水の胸へと顔を押し付ける。

そこで莉真はあることに気づいた。

「何があつたか教えてもらえるかな？」

翠は莉真の髪をやさしくすきながら問いかける。

「清也さん…無理やりキスをして…」

「うん…。辛かった？」

「わからん…。でも、ちつとも嬉しくないんです」

「うん」

そこでぱっと顔をあげる。

「気づいたんですね。」

「何に？」

「私の好きな人は翠さんだつて」

翠は一瞬目を見開きギュッと莉真を抱きしめた。

「僕も好きだよ。莉真のこと…。守りたい」

「翠さん…。私気付いたんです。」

いつもそばにいてほしい時にいてくれたのは…いつも支えてくれていたのは…

翠さんだつて

「莉真…」

2人は顔を見合せてゆつくりと目を閉じて唇を重ねた。

一方家では…

「おい、莉真に何したんだよ…」

碧は仁王立ちになつて清也を見下す。

「おまえに言つ必要はねえよ

「はあ！？…」

碧が何か言いかけた時部屋の扉があいた。

「碧、もういいよ」

「兄さん！？と莉真」

碧は莉真を見てほつとした。

翠は碧をどけて清也の前に立つ。

「兄さん、一発なぐつてもいい？」

「は？……いってえ

翠は間髪入れずに胸倉を掴んで清也を殴る。

清也は殴られた頬を抑えた。

「話しさ聞いたよ…。力づくじゃ手に入らないってわかつてゐるよね

翠が説教してゐる後ろで碧は莉真にこっそり尋ねる。

「何されたの？」

「だいたい…わかるでしょ？」

碧は少し考え込んでひらめいた。

「キス…とか？」

「じ明答…」

言ひ合ひをしてくる清也にぼそとだけ聞こえるよつと碧は言つた。

「お前、そういう人間だったのか。さいてーだな

「おまえに言われたかねーよ」

そこで莉真は気づいたように階段を下りて行つた。

「莉真？」

碧は部屋から顔を出して呼んだ。

「クッキー焼いてたの。お茶にしまじょ？？」

まだ言い争つてる2人に碧は莉真に言われことを言った。

階段を降りる途中、碧は翠に問いかける。

「なあ…。莉真つてわあ…兄さんのこと好きってか。付き合つてるのか?」

莉真の気持ちにうすうす気づいていた碧はズバッと聞いた。

「あ、気づいてたんだ。……さつき、探しに行つたときにな」

「ふうん。まあ、俺には気がなかつたってことだよな」

碧は頭の後ろで手を組む。

「でも、莉真泣かせたらただじや置かないからな」

「うん、わかつてゐよ」

そんなこんなで1か月の同居生活も終わり両親たちが帰つてきた。

「ただいま。莉真~。お土産いいっぱいあるわよ~」

「おかえり」

そのあとはあつといつ間に夏休みも終わつてしまい。

その夏休みから半年以上たとつとしていた、3月中旬

「莉真~」

昼休みに机に座つて本を読んでいると萌が前の椅子へと座つてきた。

莉真はゆつくりと本から田線を上げる。

「どうしたの?」

「さつき碧から聞いたんだけど、翠先輩。合格したらじこみよ」

碧は1~1月から萌と付き合つていた。

「へえ…」

視線を本へと戻す。

「あれ?驚かないの?」

再び顔をあげてほほ笑む。

「さつき、メールきたからね」

「よかつたね」

「うん。合格より驚きなのは一人だよ…。あんなに嫌つてたのに…」

萌は苦笑して頭をかいた。

「よくよく考えればいい奴だつたーみたいな感じですよ」

「まあ、幸せならそれでいいけどね」

外を見るとまだ寒い風の中に暖かな春の日差しが教室へと入る。桜の木の先にはつぼみが膨らんでいた

## 第4話・本当の気持ち（後書き）

夏休み中には間に合いました…。  
あんまり題名となかみが関連しませんがそこは温かい田でみてや  
つてください。

他の作品も見ていただけたら嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8112e/>

---

夏色!!

2010年10月11日08時09分発行